

# 長い道

柏原兵三

文学碑建立記念選集（上）

桂 書 房

文学碑建立記念選集（上）

## 長い道

昭和五十八年十一月二〇日発行

著者 ©柏原兵三

発行者 勝山敏一

印刷 菅野印刷興業株式会社

製本 飯島製本株式会社

発行所 桂書房

〒939-01 富山市北代二八九-三二

北代ハイツ一〇三

電話（〇七六四）三四一四六〇〇

振替口座 金沢八一六七

定価 一九〇〇円

※造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら送料当社負担でお取替えいたします。

※本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

# 長い道



## 柏原兵三文学碑のこと

大 江 健 三 郎

柏原兵三さんは、ドイツ文学の専門家で、ドイツ留学に根ざした作品もあります。それでも独特の土地についての感覚がみられますが、とりわけ柏原さんの文学が生彩を發揮したのは、かれの父祖の地、また疎開して少年時をすごしました富山県入善町での生活を、じつにこまかな事実と観察と情感とをこめて描くときでした。過去の細部をこのように生きいきと描くことは、文学のひとつのかたちではありますけれど、日本の現代文学において下火であったその傾向を、柏原さんは復興したのです。そしてその仕方を用がしたものに、ドイツ文学の教養と、そして子供の魂を育くんだ土地をいつまでも自己の核心におく、柏原さんらしい生き方があったと思います。そのような柏原さんの文学碑が、ほかならぬその父祖の地の、学校跡に建つことを、柏原さんの文学と人となりを懷しむわれわれは心から喜びます。

## 目次

柏原兵三文学碑のことへ大江健三郎へ  
小説の舞台となった付近図

|      |     |
|------|-----|
| 序    | 7   |
| 第一章  | 17  |
| 第二章  | 45  |
| 第三章  | 73  |
| 第四章  | 99  |
| 第五章  | 121 |
| 第六章  | 157 |
| 第七章  | 191 |
| 第八章  | 227 |
| 第九章  | 269 |
| 第十章  | 307 |
| 第十一章 | 343 |
| 第十二章 | 389 |
| 終章   | 421 |

「疎開」隨筆

富山と私——疎開時代の思い出……………432

疎開派の『長い道』……………437

各紙書評

疎開少年のひたむきな生活〈松本道介〉……………446

疎開児をめぐる愛憎〈朝日新聞〉……………447

子どもたちの政治的狀況〈加賀乙彦〉……………448

富山県を舞台に力作〈間野潜竜〉……………449

少年の目がみた戦争〈山田智彦〉……………451

学童疎開の小説〈日本経済新聞〉……………453

骨太い柏原文学を生んだ『長い道』〈奥田淳爾〉……………454

年譜……………456

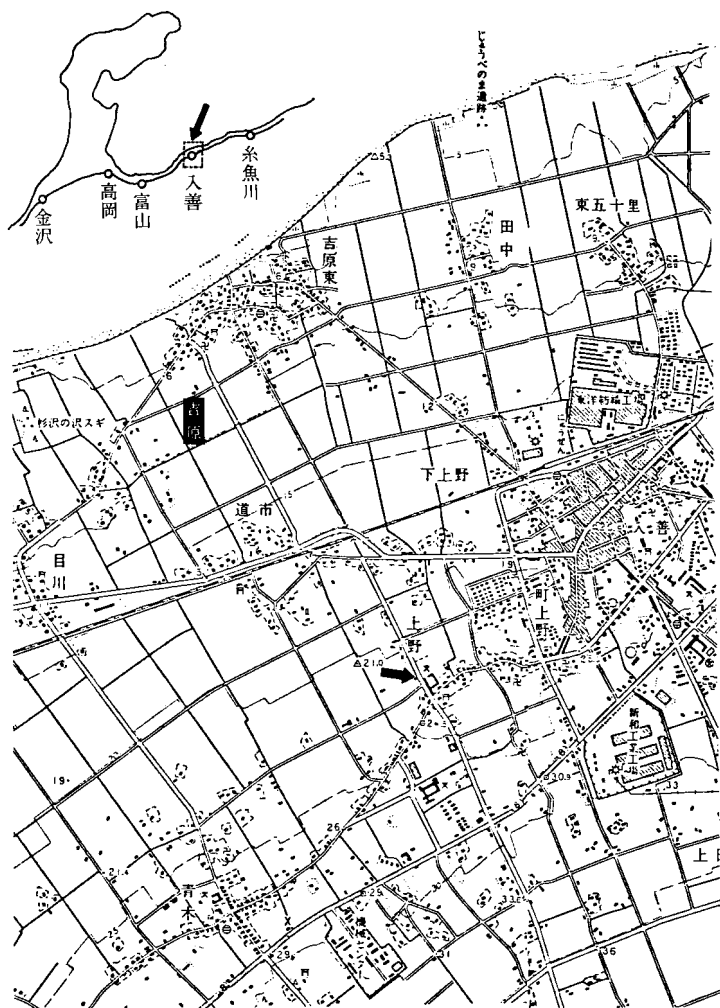
編集後記……………458

装 幀 須藤陽子（版画家）

各章扉カッタ 藤子不二雄著『少年時代』講談社刊（五巻本）

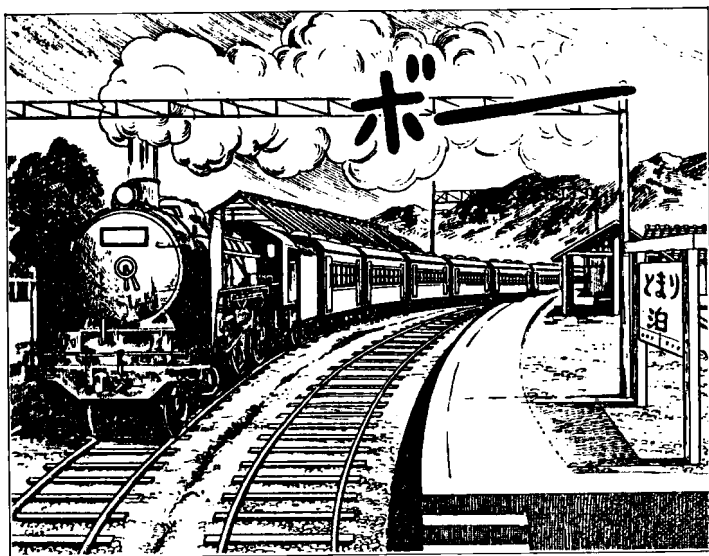
より転載。『長い道』を原作とするコミック。





小説の舞台となった付近図 (国土地理院発行1:25,000より転載)

序  
章



父の故郷である北陸の日本海沿いの半農半漁の舟原村を初めて訪れたのは、昭和十九年の六月末のことだった。父の次弟で前年の暮満州で戦病死した啓作叔父の村葬に参列するために、結婚して僅か一年足らずのうちに未亡人になってしまった年若い光子叔母と一緒に出かけたのだ。三人兄弟の中で末子の僕が兄弟の代表に選ばれたのは、いよいよ九月から始まる本格的な学童疎開に備えて、あらかじめ僕を疎開先に親しませておこうという父の配慮の結果だった。二人の兄たちはこれまでに何度か夏休みを父の故郷で過したことがあったが、僕はまだ訪れたことがなかったからである。父は僕が彼の故郷に縁故疎開することを強く希望し、それを決定ずみのように考えていたが、僕の気持はまだ本心に固まっていなかった。親しい友だちと別れないで済む集団疎開に参加したい気持を捨て切れないでいたからである。

村葬は着いた日の翌土曜日の午後一時から、村の国民学校の講堂で、叔父と時を前後して戦死した三柱の英霊との合同葬として行われた。村葬なので学校からも四年以上の生徒全員が参列した。遺族席の僕は、黒い喪服に身を包んだ美しい叔母と、前の晩最終の夜行で東京を発ち、その日昼近くに到着した父と並んで、式が終るまでずっと神妙に身動きもせずには大人用の椅子に坐っていた。本当をいえば、参列している先生や生徒たち、殊にいずれ同級生となるかも知れない五年男組の生徒たちの様子を窺いたかったのだが、式のあいだは亡くなった叔父のことだけを考えるように努めるのが、悲しみを新たにしている光子叔母の介添役をもって任じている僕の果すべき神聖な義務だと思われたからである。

多忙な父はその日の夜行でまた東京に帰ったが、僕は叔母と共に日曜日の夜まで滞在すること

になった。

日曜日の昼前に僕は海に出かけた。父の兄の辰男伯父が後を嗣いでいる父の生家から海までは走れば五分とかからなかった。前日に土地の子供たちがもう泳いでいるのを見たので、帰る前に一度泳いで行こうと心に決めていたのである。海辺では二、三人の小さな子供たちが真裸で水浴びをしているだけだった。海は波一つなかった。僕は持参した赤い褌ふんどしを締めると簡単な準備体操をしたのち、海の中に入って行った。水は少し冷たかったがすぐに慣れた。海はすぐに深くなった。僕ははるかかなたにぼんやりと見える能登半島に向って得意のクロールで泳いだ。もう大分泳いだからずいぶん分に出たろうと思い、クロールを止めて、海辺を振り返ってみると、まだ精々百米位しか泳いでいないことが分った。僕はそれ以上沖に出るのを止め、水に身体を浮かして身体を休めては、海岸に平行に泳いだ。水に身体を浮かして空を仰ぎ見るのは氣持がよかった。空は信じられない程青く澄んでいたし、自分だけが今世界中でたった一人海の中に漂っているような不思議な感情に襲われた。

三十分位そうやって泳いだのち、海から上って、浜の小石の上に寝そべって甲羅を乾しながら休憩をとっていたが、ふと気づくと、どこから現われたのか、僕と同年輩位の四人の男の子がそばに立っていた。僕は上半身を起して、よろしくというようにちよつと頭を下げてみせた。するとそれに答えるように、その中の一人が、微笑を浮べて話しかけて来た。

「いつ疎開して来るのや？」

僕は自分の疎開がもう知れ渡っているらしいのに驚きながら答えた。

「まだここに疎開して来ると決ったわけじゃないけれども、疎開するとしたら二学期の始まる九月からだね」

僕に質問した男の子の顔から微笑みが消えた。

「ここに疎開せん場合はどこへ行くんや？」

その時「潔ちゃん」と僕の名前を呼ぶ光子叔母の声が堤防の上から聞えて来た。振向くと白いワンピース姿の叔母が手を振っている。

「お昼御飯よ」

僕は手を振って答え、すぐに服を着ようとしたが、まだ男の子の質問に答えていなかったのに気づいていった。

「集団疎開にしようかとも思っているからなんだよ。でも結局は縁故疎開にするかも知れないから、その時はよろしくね」

服を着終ると、僕は堤防の上で待っている叔母の方に急いで走り出したが、すぐそのあとで別れの挨拶をして来なかったことに気づいて、うしろを振向き、「さようなら」と大きな声でいった。しかし四人の男の子のうち誰一人として答えてくれる者はいなかった。

昼食を終って、光子叔母と二人で奥の部屋で荷物の整理をしていると、庭の方から口笛を吹く音が聞えて来た。初め気に留めないで聞き流していたが、いつまで経っても繰返されるので、しまいには叔母が不思議がって立って行った。

まもなく「潔ちゃん、お友だちよ」という叔母の声が聞えて来た。

胸に落ちないまま出てみると、庭先で叔母が赤ん坊をおぶった男の子に一生懸命入るようにと勧めている最中だった。よく見るとさつき浜辺で話しかけて来た男の子だった。

「何だ君か」といいながら僕も下駄をつっかけて庭先に出た。

男の子は叔母がはずかしいのか、含羞<sup>はにか</sup>んだような笑いを浮べて、要領を得ない返事をさつきから繰返しているらしかった。僕は叔母の傍らに立つと、

「ちょっと上れよ」と勢い込んで勧めた。

丁度そこへ畠に野菜を取りに行っていた芳江伯母が戻って来た。彼女は「進ちゃん、上らっしゃれよ」と遠くから声をかけて近づいて来た。

「さあ、遠慮せんと、進ちゃん、上らっしゃらんか。潔ちゃんが東京から見えたら、話したいといっておらすたというでないか。上って、潔ちゃんから東京の話を聞かしてもらったり、またあなたからもこの話をして上げてくらっしゃれよ」

進と呼ばれた男の子はようやく心を決めた見え、「じゃあ、家にボボをおいて、また出直して来るわ」といって帰って行った。

進がいなくなったあと、僕は芳江伯母の口から、進が縁故疎開をすれば僕の入ることになる五年男組の級長だと教えられて、ひどく驚いてしまった。僕が想像の中で描いていた田舎の国民学校の級長は、小倉の詰襟服を着た少年とか、久留米紆の着物姿の少年だった。そんなイメージからまったく懸け離れた、裸に近い上半身に赤ん坊をおぶった今の子供が級長だといわれても、す

ぐには信じられないような気持がしたのだ。伯母は更に、彼が隣村の国民学校の教員をしている人の長男で、学校が出来る上に、大勢の弟妹たちの面倒をよく見、また農業と漁業を兼業している家業の手伝いを骨惜しみなくするので、村でも評判な子だと教えてくれた。

やがてカーキ色の半袖シャツを着込んで来た進が再び姿を現わした。彼は僕らの居間にあてられていた奥の部屋に通されて、しばらくの間固くなっていたが、光子叔母がお茶と東京からお土産に持参したもなかを運んで来て引きさがってしまうと、安心したように口を利き始めた。

浜辺で僕がもしかししたら集団疎開に行くかも知れないと答えたのが彼には気がかりらしかった。彼はすぐにその問題に触れた。――なぜ集団疎開なんかしようとするのか、集団疎開なんかしてもいいことは何もないではないか、見も知らぬ土地へ行つて、どんな扱いを受けるか分らない、三度の食事だって満足にできないかも知れないではないか、ここなら知った者ばかりだし、魚は漁れるし、白い米の飯は腹一杯食べられるだろう、そんなことを時々口籠りながら、できるだけ標準語を使おうと努力しつつ、説得するように喋ったのである。

進の話に耳を傾けながら、僕がなぜ集団疎開を諦め切れないでいるのかを進が全然理解していないのに不満を覚えたが、僕が縁故疎開をしてこの土地へやって来るのを待っていてくれるらしい進の気持には心を動かされないうちはいらなかった。――進はきっと僕を通じて未知の世界に触れたいのだろう。しかしその点では僕も同じだった。縁故疎開をすれば、集団疎開とは比較にならない位、田舎という未知の世界に融け込むことができるだろう。土地の子供たちと交りのない毎日を送り、そうした生活から、父が強調するように、都会では得られない数多くの貴重な体

験を獲得できるに違いない。もし先生や親しい友だちと別れないですむ集団疎開を断念して縁故疎開に踏切ることになれば、きっと僕は間違いなくそうした意義の実現に努め、父の期待に応えるだろう……

進が話し終った時、僕は進を落胆させないためだけではなく、本当にその気持になってこう答えていた。

「もしかしたら集団疎開なんか止めて縁故疎開に決めるかも知れない。君という友だちも出来たし、今日海で泳いでいても楽しかったから」

僕はこの際進の口から色々なことを聞き出しておこうと思ひ立ち、それまで遠慮していたものかを進が食べ終るのを待って、いくつかの質問を試みた。進は質問に答えて、要領のいい説明を与えてくれた。それによれば、村の国民学校の生徒の総数は五百人に満たない。一学年に男と女の組がそれぞれ一組ずつあって、一組の人数は三十四、五人位だが、高等科になると上級学校へ行く者や働きに出る者が抜けるので、一組二十人位になってしまう。中学を受ける者は毎年かならず二、三人いるが、ここ十年間一人以上受かったためしがない。それもここ数年間「浜見」の者ばかりが受かっている。舟原村は「浜見」、「野見」、「山見」の三つの字から成り立っているが、どういふものか自分たち浜見の者がすぐれている（そう進は誇らしげに注釈を加えた）。

今の六年は級長と副級長が揃って非常によく出来るので二人とも中学に合格するのではないかといわれているが、二人とも浜見の者だし、しかも級長の方は自分の従兄である。自分の組でも中学校進学志望が自分を入れて三人いる。担任の先生は今学期の初め、山の方の学校から転任して



来た増田という人だが、優しくてしかも授業のうまいとてもよい先生だ……

ざっとそんな説明をしてもらった時、芳江伯母が入って来て、

「進ちゃん、家から呼びにいらすたぜ」と告げたので、僕は会話を中断しなければならなかった。

進は含羞<sup>はてな</sup>んだような笑いを浮べて立上りながら僕に聞いた。

「いつ帰らあ？」

「今晚の夜行で」

「もう今晚帰らあ」と進は驚いたようにいった。

「だって学校があるから」と僕は答えて、光子叔母を呼んだ。

玄関に進の小さな弟が待っていた。下駄をはいた進は、送りに出て来た東京の光子叔母にまぶしそうな顔を向けてお辞儀をすると、僕の方を向いて、

「さようなら、また会わんか」といって行ってしまった。

夕食の前に、僕は光子叔母に誘われて、浜辺に散歩に出かけた。コンクリートの堤防を降りて、波打際を歩きながら、僕は舟が出るのを見物に行った。網を打ちに行く時刻で、漁師たちが舟を出しているさなかだったのである。

舟の方に向って歩いているとうしろの方から突然「潔」と呼ぶ声がしたので、振向くと進だった。堤防の上の舟小屋から運んで来たらしい自分の身体の倍位ある網をかついでいる。進は白い